

平成二十四年八月十日発行
皇學館論叢第四十五卷第四号
抜刷

紹介

廣瀬明正著 『播磨古代史論考』

堀
井
純
二

廣瀨明正著 『播磨古代史論考』

堀井純 二一

この度、廣瀨明正氏の表題の書が皇學館大学出版部より発刊された。本書は著者が博士論文として平成二十二年に皇學館大学に提出された『播磨古代史の諸問題』（翌二十三年博士号授与）を一部補訂し、付論を加へて公刊されたものであり、目次を示せば以下の如くである。

- 序
- 第一章 大倭氏と明石海峡周辺（はじめに 一、神武天皇について 二、大倭氏の本貫と出自 三、海部と明石・淡路島 むすび）
- 第二章 四道將軍と播磨地方（はじめに 一、四道將軍の实在性 二、吉備津彥命の系譜 三、播磨の吉備氏
- 第三章 伊和大神とアメノヒボコ（はじめに 一、伊和大神について 二、播磨の三輪・大倭氏 三、アメノヒボコの動向 むすび）
- 第四章 播磨三国造とその古墳（はじめに 一、三国造の設置時期 二、針間鴨国造と玉丘古墳 三、針間国造と壇場山古墳 四、明石国造と五色塚古墳 むすび）
- 第五章 播磨国風土記の世界（はじめに 一、伊和大神の子神たち 二、大三間津日子命について 三、景行天皇と印南別媛 四、石の宝殿をめぐる問題 むすび）
- 第六章 播磨国の前方後方墳（はじめに 一、前方後方墳の

分布状況 二、ニギハヤヒ命系氏族の足跡 三、前方後方墳の周辺氏族 むすび)

第七章

神功皇后と応神天皇 (はじめに 一、播磨国風土記の皇后伝説 二、神功皇后の奉祀神社 三、播磨における応神天皇伝承 むすび)

第八章

倭の五王時代の播磨 (はじめに 一、仁徳天皇と播磨の関係 二、難波津と播磨の御津 三、播磨の御名代と屯倉 むすび)

第九章

顕宗・仁賢天皇と播磨国 (はじめに 一、市辺押磐皇子と二王の系譜 二、億計・弘計二王の逃走経路 三、二王と播磨の縮見屯倉 むすび)

付論1

古代播磨における石作連の動向

付論2

播磨国風土記「安師里」について

付論3

生田神社とウナカミ氏

あとがき

初出一覧

索引

目次を見れば明らかなやうに、本書は神武天皇から顕宗・仁賢天皇の時代まで、『日本紀』でいへば巻三から巻十五までの時代における大和朝廷と播磨国との関係について、『日本紀』・『古事記』・『播磨国風土記』・『住吉大社神代記』などの文献史料

や考古学の成果を駆使して解明しようとしたものである。

すなはち第一章 大倭氏と明石海峡周辺は、神武天皇東征時における大倭氏について解明したものであり、大倭氏は本来は播磨沿岸部、淡路島周辺を拠点とする海部であつたものが、神武天皇東征における功績により大倭国造に任ぜられ、次第に大和地方に勢力を伸ばし、朝廷内に地歩を築いて行つたものとする。

第二章 四道將軍と播磨地方は、『播磨国風土記』によれば加古・印南郡地域には景行天皇朝には益氣御宅が設置され、大和朝廷との深い繋がりが窺はれるが、その契機となつたのは、崇神天皇朝における四道將軍の派遣、殊に吉備津彥命の西道派遣に際し、この地域が前線への食糧・物資の補給基地となつたことによるとする。

第三章 伊和大神とアメノヒボコは、垂仁天皇朝におけるアメノヒボコの渡来に際して『日本紀』では三輪氏・大倭氏が派遣され、平和裡に交渉が行はれたやうになつてゐるが、『播磨国風土記』では伊和大神・葦原志許乎命とアメノヒボコとの国占めの戦闘が描かれてゐる。この葦原志許乎命は三輪氏を指し、伊和大神は伊和氏を代表とする土着勢力をさすものであり、これらの勢力とアメノヒボコ侵入に際しての戦闘を描いたものであり、以後朝廷と播磨地方の関係はより深まつて行つたとする。なほ『播磨国風土記』には大倭氏のことには描かれてゐ

ないが、大倭氏は明石海峡の封鎖に努めたためと考へられると
してゐる。

第四章 播磨三国造とその古墳は、成務天皇朝に針間国造
(飾磨・揖保郡)と針間鴨国造(賀毛郡)が、応神天皇朝に明
石国造(明石郡)が置かれることにより、播磨には賀古・印南
地域と三国造支配の四勢力圏が存在したことになるのである、
それは日岡山古墳群、壇場山古墳(針間国造墓)、玉丘古墳(針
間鴨国造墓)、五色塚古墳(明石国造墓)等の分布により類推
できる。これら三国造のうち針間国造と針間鴨国造の出自は皇
室であり、明石国造は大倭氏の同族であるところよりして大和
朝廷は四・五世紀にその勢力を播磨地方に浸透させたものとする。

第五章 播磨国風土記の世界は、『播磨国風土記』に見える
説話・伝承を取り上げ、伊和大神及び子神を奉祭する豪族が播
磨各地に存在したことを明かにするとともに、その播磨が大和
朝廷の統治下に入るのは垂仁天皇朝のアメノヒボコ侵入事件を
契機とするのであり、以後重視されることとなるのであり、そ
れが景行天皇の印南別媛求婚の説話ともなつたものとする。そ
してさらに石の宝殿について、これを『万葉集』の「志都の石
室」の有力な候補地であり、生石神社の祭神は石神信仰から奉
祭されたものとする。なほこの石の宝殿については付論1「古
代播磨における石作連の動向」においても述べられてゐる。

廣瀬明正著『播磨古代史論考』(堀井)

第六章 播磨国の前方後方墳は、播磨国における前方後方墳
について検討を加へたものであり、その築造年代は三世紀後半
から四世紀前半に限られるものであり、その築造者は物部・尾
張氏族であることを明かにしたものである。

第七章 神功皇后と応神天皇は、架空、伝説上の人物とされ
ることの多い神功皇后について、『播磨国風土記』に伝へられ
てゐる伝承を検証することにより、その非實在論の不当性を明
らかにし、さらに播磨国における応神天皇の伝承を検討するこ
とにより、応神天皇・仁徳天皇一体説を唱へる直木氏説を批判
したものである。

第八章 倭の五王時代の播磨は、倭の五王の讚を仁徳天皇と
推断し、その仁徳天皇と播磨国との拘はりについて明らかにす
るとともに、「難波津」の建設は大陸との交通による大型船停
泊のための港の建設であり、それが「住吉の御津」のことであ
ることを述べ、その建設以前に、大型船停泊の地として播磨に
おいて選定された所が揖保郡の「御津」であつたことを指摘し、
五世紀には播磨国にも御名代や屯倉も制定され、朝廷との関係
も強固になつたが、反面朝廷と在地勢力との摩擦、軋轢も生じ
ることとなつたとされてゐる。

第九章 顕宗・仁賢天皇と播磨国は、憶計・弘計二王が長年
に渡り播磨において逃亡生活をする事ができたのは、忍海

部・佐伯部・来米部等の血縁、地縁で結ばれた人々の保護、支援があったからであることを明かにしてゐる。

付論1 古代播磨における石作連の動向は、第五章の石の宝殿についての補論を兼ねたものであるが、三世紀後半から七世紀後半に至る長年月に亘り竜山石は古墳の石棺などに活用されてきたが、その採石・加工に携はつた集団を率ゐたのは石作連系の氏族とみ、それは物部氏に繋がる氏族であつたと推論してゐる。

付論2 播磨国風土記「安師里」については、『播磨国風土記』に記されてゐる「安師里」について、飭磨郡の「安師里」は大和国の穴師神（穴師坐兵主神社）の神戸であつたところより命名されたものとし、宍粟郡の「安師里」は安師比売神に基づく命名であるとする。そしてその「アナシ神」はイセツ彦と関係があるところから「風の神」とも見做されるが、そのイセツ彦の奉祭氏族は大汝神系氏族または出雲氏系氏族であるとしてゐる。

付論3 生田神社とウナカミ氏は、生田神社を奉祭したウナカミ氏について考察したものであるが、このウナカミ氏は天穂日命を祖とする出雲氏の同族であり、上海上国造、下海上国造の同族であり、本来畿内に勢力を持ち、伊雑宮にも関係した氏族であるところから、生田神社を奉祭することになつたとする。

本書を一読して感じるのは、長年神社界にあつて神明に奉仕する多忙な中においても、播磨国古代史に関する研究論文（書）に注意を払ひ、それらを消化して自らの所論を展開してゐる点である。それ故にそれぞれの所論は単なる思ひ付きや想像ではなく、確實穩当な結論を導き出し、読者をして納得せしめるものになつてゐることである。勿論その結論が絶対といふことなく、異論も存在するであらうが、今後本書を無視して自説を展開することは出来なくなつた点においても、本書の価値が存すると言へよう。

著者は筆者の二年先輩であり、学生時代より種々の面でお世話になつて来た方である。本書の出版に敬意を払ふと共に心よりお喜びを申し上げるものであるが、若干以下のやうな誤植が存するのは残念であることを記して紹介の文とする。

註 表1・2・3については、著者は『播磨国風土記』に開する表のみを章を超えて1・2・3としてゐるが、他にも八〇頁・八五頁・一七七頁・二一二頁に表が存在してゐるのであり、これらも章別にするべきであつたらう。

		誤	
四五頁十五行目	表1のやうに	表1のやうに	表のやうに ○註
四六頁	表1播磨国風土記神名記載箇所数	表。播磨国風土記神名記載箇所数 ○註	
六一頁二行目	来泊ことが	来泊したことが	
八九頁十四行目	まづ表2によれば	まづ表によれば ○註	
九〇頁	表2播磨国風土記伊和大神関係神名記載箇所	表。播磨国風土記伊和大神関係神名記載箇所 ○註	
九三頁九行目	駅使（はゆまつかひの）文字が	駅使（はゆまつかひ）の文字が	
九八頁	表3播磨国風土記天皇名記載箇所数	表。播磨国風土記天皇名記載箇所数 ○註	
九八頁一行目	表3を	表を ○註	
一九八頁八行目	難波津が住吉津抑えて	難波津が住吉津を抑えて	
二二三頁五行目	という	といふ。	
二四九頁一・三行	定二賜国造	定。賜国造	

A5判 二八二頁 皇學館大学出版部発行 定価二九〇〇円
 (税込)

(ほりゐ じゅんじ・日本文化大学教授)